

わかたけちょう
富山市若竹町遺跡発掘調査報告書

—（仮称）熊野コミュニティセンター（公民館）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015

富山市教育委員会

わかたけちょう
富山市若竹町遺跡発掘調査報告書

-（仮称）熊野コミュニティセンター（公民館）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 -

2015

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市若竹町・森田地内に所在する若竹町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会生涯学習課が事業主体である（仮称）熊野コミュニティセンター（公民館）建設工事に伴うものである。富山市教育委員会生涯学習課の委託を受けた有限会社毛野考古学研究所富山支所が発掘調査を実施し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが監理を行った。
- 3 発掘調査・整理調査期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

調査期間：現地調査 平成26年8月18日～平成26年8月30日

整理調査 平成26年9月1日～平成27年3月16日

調査面積：109m²

監理担当者：富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主査学芸員 小松博幸

調査担当者：有限会社毛野考古学研究所 土生朗治 常深尚

- 4 現地調査において、熊野公民館の協力を得た。
- 5 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆は、第I・II章を小松、第III・V章を土生が行い、編集は常深が担当した。

凡　　例

- 1 方位は座標北、水平水準は海拔である。
- 2 公共座標は平面直角座標、世界測地系（第Ⅳ系）を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
- 3 遺跡・遺構の表記は以下の記号を用いた。
W T C：若竹町遺跡
S D：溝 S I：堅穴建物 S K：土坑 S P：ピット
- 4 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 財團法人日本色彩研究所）を使用した。

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査及び整理調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	5
第1節 調査の方法	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構	7
第4節 遺物	14
第Ⅳ章 自然科学分析	18
第1節 放射性炭素年代測定	18
第Ⅴ章 総括	21
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

第1図	調査区位置図 (1 / 1,000)	1
第2図	富山平野の地形分類概略図 (1 / 200,000)	3
第3図	若竹町遺跡周辺の遺跡分布図 (1 / 30,000)	4
第4図	基本層序 (1 / 20)	5
第5図	遺構全体図 (1 / 200)	6
第6図	竪穴建物 S I 01 (1 / 60)	7
第7図	竪穴建物 S I 02 (1 / 60)	8
第8図	竪穴建物 S I 03 (1 / 60)	8
第9図	土坑 S K 01 (1 / 40)	9
第10図	土坑 S K 02 (1 / 40)	9
第11図	溝 S D 01 (1 / 60)	10
第12図	溝 S D 02~04 (1 / 60)	10
第13図	溝 S D 05 (1 / 60)	11
第14図	烟跡 S D 06 ~ 25	11
第15図	ピット S P 01 ~ 17	12
第16図	ピット S P 18 ~ 36 (S P 33 - 34 欠番)	13
第17図	発掘調査出土遺物 [1]	14
第18図	発掘調査出土遺物 [2]	15
第19図	試掘溝出土遺物	17
第20図	層年較正結果 (1 σ)	19

挿表目次

第1表	出土遺物観察表	16
第2表	放射性炭素年代測定および層年較正結果	19

図版目次

図版01	遺構 調査区全景、調査区全景	
図版02	遺構 調査区全景、調査区全景	
図版03	遺構 北側調査区全景、東側調査区全景	
図版04	遺構 南側調査区全景、S I 01 完掘、S I 02 完掘、S I 03 完掘、S I 04 遺物出土状況	
図版05	遺構 S K 01 完掘、S K 02 完掘、S D 01 完掘、S D 01 遺物出土状況、S D 02 ~ 04 完掘、S D 05 完掘、S D 05 土層断面、煙跡完掘	
図版06	遺物 出土遺物①	
図版07	遺物 出土遺物②	
図版08	自然科学分析 上層炭化物層、下層炭化物層の産状	

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

若竹町遺跡は、昭和 63～平成 3 年度に富山市教育委員会（以下、市教委）が実施した市内遺跡分布調査で確認した遺跡である。平成 5 年度市教委発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に「若竹町遺跡」として登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地（市No.201527）として取り扱うこととなった。平成 25 年度の『富山市遺跡地図』改訂にあたり、遺跡番号を市 2010684 と変更した。平成 19 年度に個人住宅建設に伴う本発掘調査、平成 10・17・19・20・25 年度に住宅建設等に伴う試掘調査等を行っている。現在の遺跡面積は約 77,000m²で、種別は集落である。

平成 25 年 7 月 2 日、市教委生涯学習課から当該地において、（仮称）熊野コミュニティセンター（公民館）の建設について協議があった。工事予定地は、全域が遺跡範囲に含まれていたため、平成 25 年 9 月 24 日～25 日に 2,000m²を対象に市教委埋蔵文化財センターが試掘調査を実施したところ、绳文時代や古墳時代を中心とする遺構・遺物を検出し、500m²に遺跡の所在を確認した。試掘調査結果に基づき、生涯学習課と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、遺跡の損壊を免れない擁壁設置部分 109m²を対象に本発掘調査を行い、記録保存することとした。

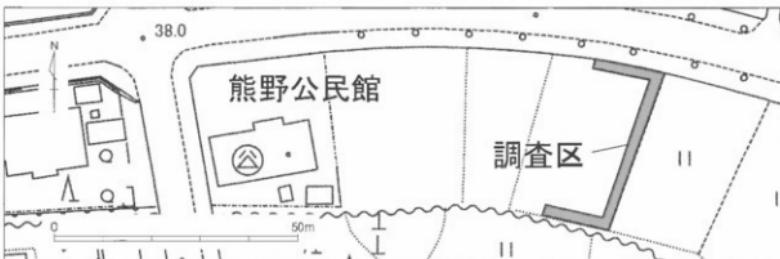
平成 25 年 9 月 5 日付けで文化財保護法 94 条第 1 項の規定による、「埋蔵文化財発掘の通知」の提出を受け、同年 9 月 11 日付け埋文第 254 号で富山県教育委員会（以下、県教委）へ副申した。

文化財保護法 99 条第 1 項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の報告」は、平成 26 年 8 月 20 日付け 25 埋文第 254 号により市教委から県教委へ提出した。

第2節 発掘調査及び整理調査の経緯

本発掘調査は、有限会社毛野考古学研究所 富山支所（以下、毛野考古学研究所）が生涯学習課から受託し、埋蔵文化財センターが監理を行った。発掘調査地の表土掘削はバックホウを用いて行い、耕土は調査区外の敷地内に横置きした。表土除去後、平成 26 年 8 月 18 日から人力による遺物包含層掘削・遺構検出作業を開始し、並行して図面作成・遺物洗浄等を行った。同年 8 月 30 日に現地調査を完了し、調査地を引き渡した。

整理調査は現地調査終了後、引き続き毛野考古学研究所が行い、出土品の実測・復元・写真撮影・自然科学分析等を行った。並行して発掘調査報告書を作成し、平成 27 年 3 月 16 日に完了した。



第1図 調査区位置図 (1 / 1,000)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山県の平野部は、北が低く南が高くなるという地勢を示し、富山市は富山県のはば中央部に位置する。富山市の地勢は大まかに富山湾に面した平野部と南部の山間部に大別され、北は富山湾、東は北アルプス、南は飛騨高地、西は丘陵性山地に囲まれている。山間部から富山湾へ流れ下る神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。海拔0mの富山湾から標高3,000m級の高山地帯まで変化に富み、東西約61km・南北約44km・海岸線約12kmである。

若竹町遺跡は、富山市中心部から南へ約6kmの富山市若竹町・悪王寺・森田・吉岡地内に位置する。本遺跡は、神通川支流熊野川の右岸の扇状地上にある。標高は約36～39mで、地勢は平坦であり湧水が豊富にあった。以前は林崎・上栄・経力・石田に沢流れがあり灌漑用水に用いるなど水源を確保しやすい土地柄だったが、現在、沢流れは殆どなくなっている。熊野川は、大山地域の西笠山に発し東福沢から平野部へと流れ出て、富山市有沢橋上流で神通川に合流し、総延長は約59kmで流域には遺跡が多くある。

地名の悪王寺は、古い絵馬やのぼり旗に悪王子と記されており、明治元年に子を寺に変えたと伝えられている（中村 1963）。

第2節 歴史的環境

今回の調査地周辺には、縄文時代から近世までの遺跡が所在し、時代により分布の数や範囲に偏りが見られる。

本遺跡では、平成19年度に今回の調査地の北西約250mで、個人住宅の建設に伴う本発掘調査（275m²）を行っている。出土遺物は、縄文土器（晩期）・弥生土器（後期）・古墳時代前期の土師器・平安時代の須恵器・土師器・鎌倉時代の土師器である。遺構は、弥生時代後期の堅穴建物・平安時代の堅穴建物・掘立柱建物跡・鎌倉時代の掘立柱建物跡である（富山市教委 2008）。

周辺の縄文時代の遺跡は、吉岡遺跡・悪王寺遺跡・任海宮田遺跡などである。吉岡遺跡では、石組炉・配石等を検出し、石組炉の周囲には遺物が密集していたが、柱穴や掘り込み等は存在しなかった（富山市教委 2002）。

弥生時代では、吉岡遺跡・黒瀬大屋遺跡などがあり、吉岡遺跡では穴から弥生土器が出土しているが、同時代の遺跡は希薄な状況である。

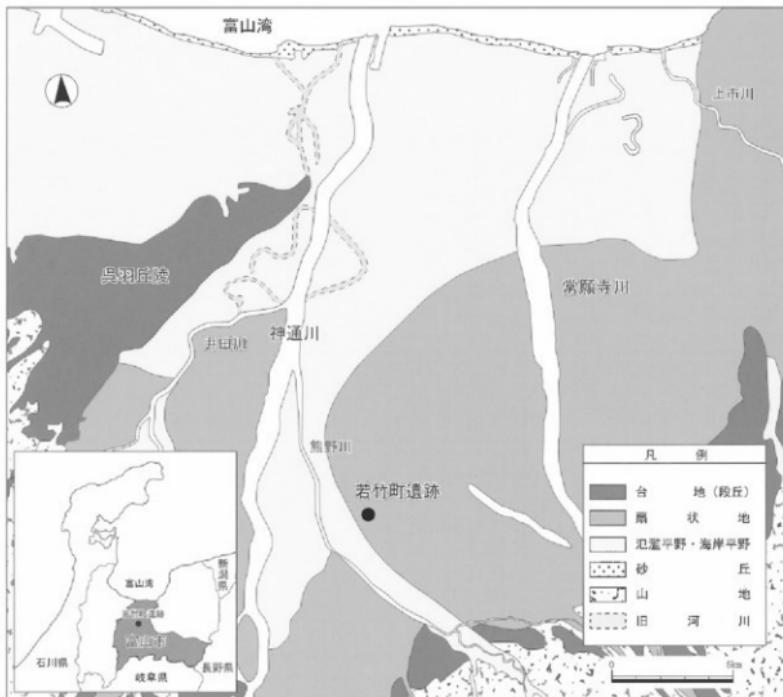
古墳時代では、任海宮田遺跡・上新保遺跡で少量の資料が得られているが、弥生時代同様に遺跡は希薄な状況である。

古代では、任海宮田遺跡・古倉B遺跡・友杉遺跡・吉岡遺跡・経力遺跡・上新保遺跡などがあり、低地の扇状地にも集落遺跡が増加し始め、積極的な土地利用が進んでいることが分かる。任海宮田遺跡を中心とする新保地区周辺の遺跡では、多くの堅穴建物や掘立柱建物跡とともに、「城長」「観音寺」「寺」等の墨書き土器やメノウ製帶飾り等が出土しており、寺院や官衙等の公的施設が存在した可能性がある（（財）富山県文化振興財団 2006・2007・2008）。吉岡遺跡や経力遺跡・上新保遺跡では堅穴建物や烟跡を多数検出し、大規模な集落が存在したと考えられる（富山市教委 1996・2000・2002）。一帯は発掘調査の成果等から7世紀後半～8世紀代に小規模な集落が出現し、9～10世紀前半に最盛

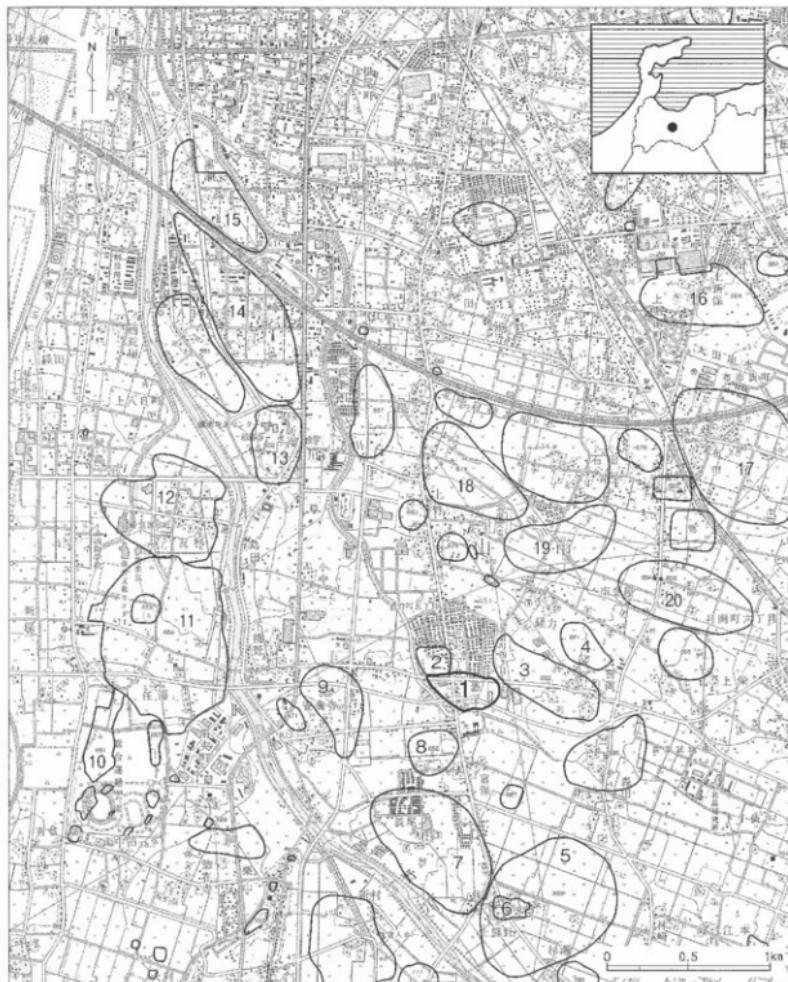
期を迎えると、10世紀後半から11世紀には一時衰退する。

中世になると、12世紀後半から再び周辺の開発が始まり集落が広がりだしたと考えられる。新保地区は、寿永3年（1184）に源頼朝が御厨などでの武士の狼藉を禁じた記録がある、「賀茂別雷神社文書」にみえる「賀茂社領越中国新保御厨」の比定地候補の一つとされる。神保御厨は、永徳2年（1490）まで賀茂神社と関係があったとされている。また、中世に起源を求める城跡・寺跡・豪族の館跡などの遺跡も多く分布し、本遺跡南方の上熊野城跡では神明社境内に土星や壠の一部を確認している。（富山県埋文2006）。北西には、中世の豪族・越川氏の越川館跡があり、文化年間（1804～1818）に富山藩士の安達淳直・直章の作成とされる「越川館跡之図」が残っている。館跡には菩提寺とされる最勝寺（曹洞宗）が現存する。布市には、城跡は確認されていないが康永3年（1344）に越中守護となつた桃井直常が、親応の擾乱で一時本拠地とした布市城が在つたとの伝承が残されており、上新保に在住する桃井家はその末裔という。布市にある興国寺（臨済宗）は興国6年（1345）直常開基を伝え、周辺には中世寺社七宮寺があつたと伝えられている。

調査地の東方には、中世に遡る飛驒街道が存在した。主要幹線である飛驒街道は飛州往来・飛州街道と呼ばれ、富山－小泉－布市－小黒－坂本－笠津の道程で小泉から布市の間は小泉－大町－下堀－上堀－布市となり、布市から笠津までは布市往来・布市道と呼ばれていた。



第2図 富山平野の地形分類概略図（1/200,000）



- | | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 若竹町遺跡 | 2 惠王寺遺跡 | 3 吉岡遺跡 | 4 経力遺跡 | 5 上熊野遺跡 |
| 6 上熊野城跡 | 7 辰尾遺跡 | 8 宮保遺跡 | 9 下熊野遺跡 | 10 古倉B遺跡 |
| 11 任海宮田遺跡 | 12 友杉遺跡 | 13 鹿川館跡 | 14 黒崎種田遺跡 | 15 黒瀬大屋遺跡 |
| 16 上新保遺跡 | 17 布市北遺跡 | 18 二俣遺跡 | 19 石田遺跡 | 20 布市遺跡 |

第3図 若竹町遺跡周辺の遺跡分布図 (1 / 30,000)

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の方法

発掘調査は表土除去後、人力による遺物包含層の掘削を行った。包含層出土遺物の取上げ後に、ジョレン等を使い人力による遺構検出作業を実施し、堅穴建物・土坑・溝・ピットを検出した。

遺構の掘削は土層観察ベルトを設け、手掘り作業によって慎重に行った。出土遺物は原位置に残し、土層観察ベルトによる分層状況と対比しながら、出土層位と平面位置・高さを記録して取り上げた。

遺構の測量は調査区周辺に基準点を設置し、電子平板測量にて実施した（縮尺1/20）。断面図は手実測で行った（縮尺1/20）。

遺構の写真撮影は35mm判フィルムカメラ（白黒・カラーネガ）・6×7判フィルムカメラ（白黒・カラーリバーサル）を使用した。遺物写真はデジタル1眼レフカメラ（有効画素数2410万画素）で撮影した。

遺構調査に伴って採取した炭化物については、放射性炭素年代測定を行った。

整理調査は出土遺物の洗浄・注記後に、写真撮影・実測を行った。注記は手書きにて行い、「WTC SK01 No.01」のように記した。その後、遺構図・遺物実測図・報告書作成とともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で入稿した。

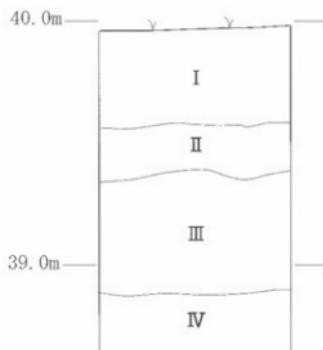
第2節 基本層序

調査区の層序は、I層が厚さ50～60cmのにぶい褐色土（7.5YR6/3）で、I層の上部は現代の畑耕作土となっている。

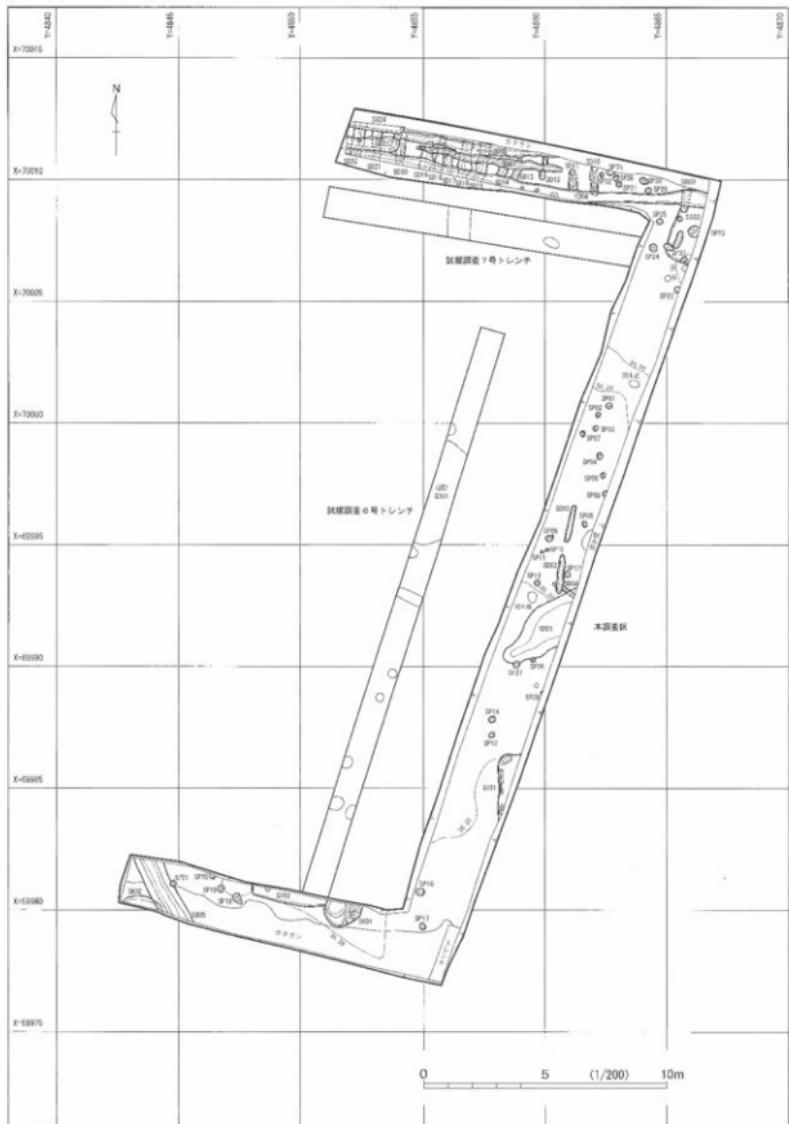
II層は厚さ約20cmのややシルト質の褐灰色土層（10YR4/1）で炭化物粒を少量含んでいる。本調査区内のII層では遺物があまり出土していないが、試掘調査では近世の陶器が出土しており、近世以降の時期の遺物包含層になるとみられる。

III層は黄褐色砂質土（10YR5/6）の地山層で、III層上面が古代の遺構の確認面となっている。調査区の南部では、III層の下に拳大の大きさの円礫層がみられた。

IV層の円礫層は、調査区の南部の溝SD05の断面で明瞭に観察できたが、この地点では厚さ40cm以上あった。IV層は調査区東部の溝SD01の底面でも観察され、円礫層はIII層の地山層の下に一定の範囲は広がっているとみられる。



第4図 基本層序 (1 / 20)



第5図 遺構全体図

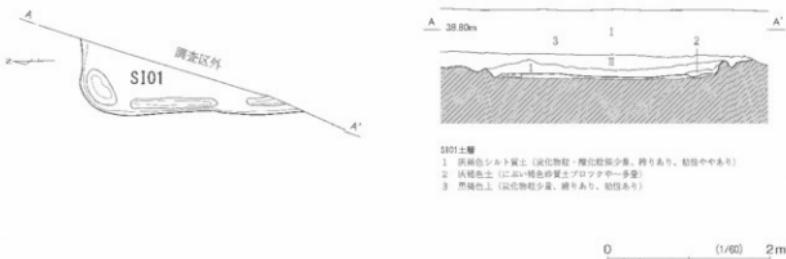
第3節 遺構

竪穴建物3棟、溝5条、土坑2基、ピット34基、畠跡を検出した。調査区の南端は東西方向に延びる現代の擾乱を確認した。発掘調査に先立つ試掘調査では、発掘調査対象地の西側で古墳時代前期の土師器を伴う竪穴建物(試)S I 01を検出した(6号トレンチ、第5図)。また7号トレンチでは縄文土器の出土があり、発掘調査の竪穴建物S I 03に伴う可能性がある。

1. 竪穴建物

S I 01(第6図)

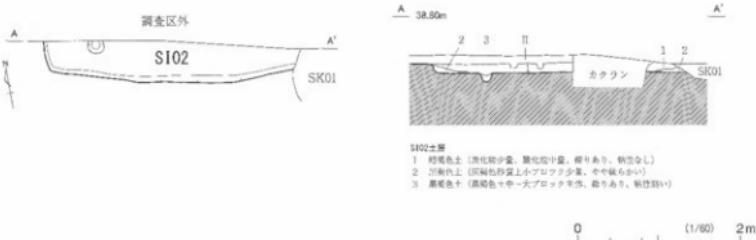
東側調査区の南部X69985～69987、Y4858～4860で検出した。南北2.65m以上、東西0.92m以上で、深さ18cmを測る。主軸方位はN-2°-Eとなる。竪穴建物の北西隅部と北壁の一部及び、西壁が直線的に延びている状況を確認し、方形基調の竪穴建物の一部と判断した。西壁際に小溝があり壁溝と見られる。壁溝は途切れながら北西隅部でやや幅広の掘り方として確認した。しかし、北壁際の地点では倒木痕の影響と思われる自然礫層からの浮き上がり礫の堆積があり、壁・壁溝も一部壊されている。覆土は炭化物粒を少量含んだ灰褐色土を主体とする。底面は覆土と比較して含有物が少なく僅かに縮まりがある面が連續的に捉えられ、床面と判断した。床下の掘り方は、深さ約5cmあり炭化物を少量含んだややシルト質の粘性のある黒褐色土であった。出土遺物は少なく、床上から出土したものはなく、覆土から須恵器杯(A)の口縁部小片が僅かに出土した。竪穴建物の時期は8世紀前半から9世紀前半頃と推測する。



第6図 竪穴建物 S I 01

S I 02(第7図)

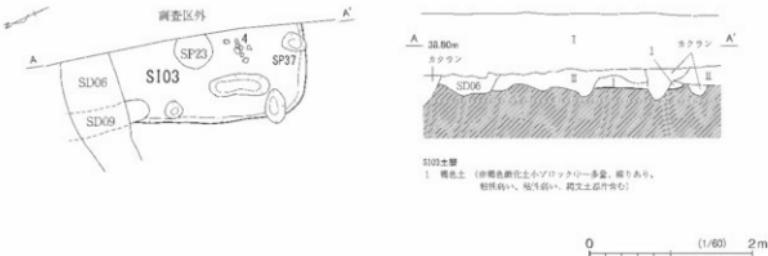
南側調査区の中央部のX69980～69981、Y4848～4852で検出した。南北0.52m以上、東西3.12m以上で、深さ11cmを測る。南側壁と南西隅部、西壁の一部のみ検出したが竪穴建物の大半は調査区の北側に延びている。南東隅部はSK 01に切り込まれているため残存していない。主軸方位はN-10°-Eとなる。床面は褐色の砂質土で、地山に非常に近い土質でほとんど掘り方をもたない。床面で南西隅寄りに径20cm、深さ20cmの小ピットを検出した。覆土は炭化物粒を少量含んだ暗褐色土が主体で、壁際にやや歛らかい黒褐色土が堆積する。出土遺物は、覆土から須恵器杯(B)の底部片、須恵器蓋の小片が少量出土した。竪穴建物の時期は8世紀後半から9世紀前半と推測する。



第7図 堪穴建物SI02

SI03（第8図）

調査区の北東部 X70005 ~ 70009、Y4865 ~ 4867で検出した。南北 2.37m 以上、東西 1.13m 以上で、深さ 15cm を測る。堪穴建物の大半は調査区外にあるが、南西隅部と南壁・西壁の一部を検出した。SD 06・09・SP 23 よりも古い。壁は直線的で、南西隅部は直角に折れており、方形の堪穴建物になると思われる。主軸方位は N - 10° - E となる。床面は褐色の砂質土で、地山に非常に近い土質でほとんど掘り方をもっていない。壁際には 3 箇所小ピットがあり、その内で南壁際の SP 37 から縄文土器の小片が出土しており建物に伴うピットと判断した。SP 37 は径 24 ~ 30cm 深さ 21cm である。覆土は炭化物粒を少量含んだ暗褐色土が主体で、壁際にはやや軟らかい黒褐色土が堆積する。遺物は、南壁寄りの床面上から縄文土器深鉢破片や磨石が出土した。堪穴建物の時期は縄文時代後期である。

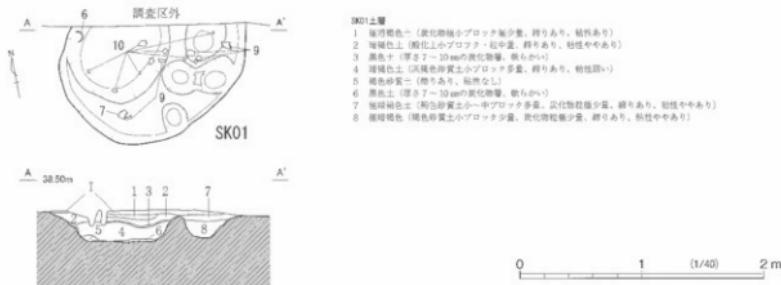


第8図 堪穴建物SI03

2. 土坑

S K01 (第9図)

調査区の南部 X69979 ~ 69981、Y4851 ~ 4853で検出した。長軸 1.43m 以上、短軸 1.33m 以上で、深さ 18cm を測る。長軸方位は N - 43° - E となる。S I 02 の南東隅部を切り込んで掘られている。2段の掘り込み形状であり、内側の深く下がる穴は、長軸 0.83m 以上、短軸 0.80m 以上で、覆土中には上層と下層に厚さ 0.7cm ~ 1.0cm の歓らかい炭化物層を検出した。外側の浅く大きな穴は、底面に樹木の根の跡のような穴が複数開くことから、一部倒木痕のような自然の営力が加わっていると考える。遺物は内側の深い穴から外側の浅い穴にかけて覆土全体から出土した。土師器の椀・甕・須恵器の杯(A)・甕などがあり、いずれも完形に復元できない破片が覆土中に散在した状態で出土した。土坑の時期は 9世紀後半代と推測する。



第9図 土坑 SK01

S K02 (第10図)

調査区の南西部 X69980 ~ 69981、Y4843 ~ 4845で検出した。東西 1.66m 以上、短軸 0.44m 以上で、深さ 10cm を測る。S D 05 より古い。底面が平坦で、底面には厚さ 0.5cm 程の水平な褐色土が堆積する。覆土は締まりのある褐色砂質土を主体とする。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

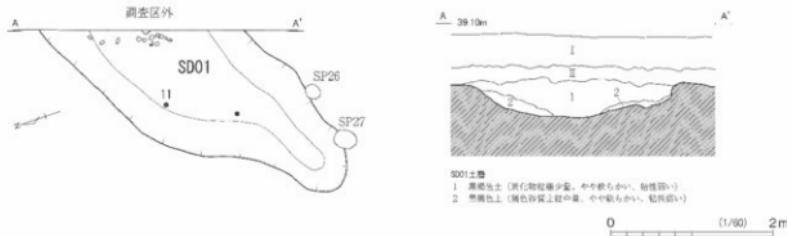


第10図 土坑 SK02

3. 溝

S D01 (第11図)

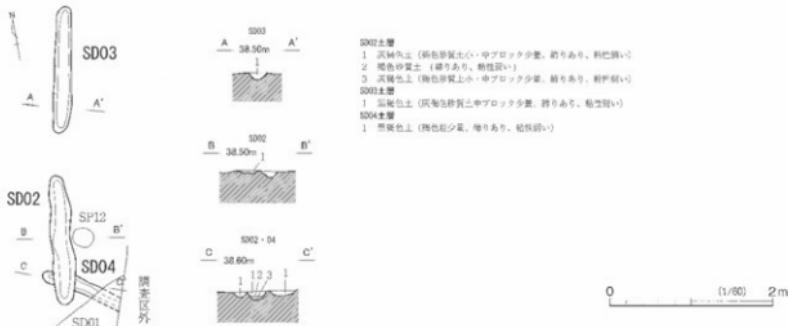
X69990～69994、Y4858～4862で検出した。長さ3.45m以上、幅1.80mで、深さ45cmを測る。長軸方位はN-58°-Eとなる。断面形は中央部がやや深くなる船底状で、北西方向は調査区外へ延びるが、南西端部は緩やかに立ち上がりながら調査区内で途切れる。覆土は炭化物粒を少量含む黒褐色土を主体としており、下層から土師器壺の破片が自然礫とともに出土した。底面には自然礫層が露出していた。溝の時期は古墳時代後期と推測する。



第11図 溝 SD01

S D02～04 (第12図)

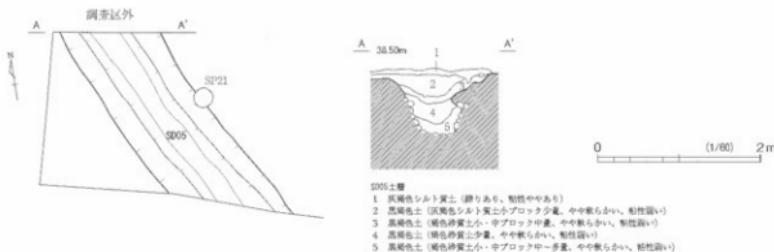
S D02はX69993～69995、Y4860～4861で検出した。長さ1.58m、幅0.29mで、深さ14cmを測る。長軸方位はN-5°-Eとなる。S D04より新しい。覆土は、地山に由来する褐色砂質土ブロックを含んだ灰褐色土を主体とする。S D03はX69995～69997、Y4860～4862で検出した。長さ1.54m、幅0.24mで、深さ8cmを測る。長軸方位はN-10°-Eとなり、S D02と同方向である。覆土は褐色砂質土ブロックを含んだ黒褐色土を主体とする。S D04はX69993～69994、Y4860～4862で検出した。長さ1.04m、幅0.17mで、深さ7cmを測る。長軸方位はN-53°-Wとなる。S D02より古い。覆土は、地山の褐色砂質土を少量含んだ黒褐色土を主体とする。いずれの溝も出土遺物がなく、帰属時期は不明である。



第12図 溝 SD02～04

S D05 (第13図)

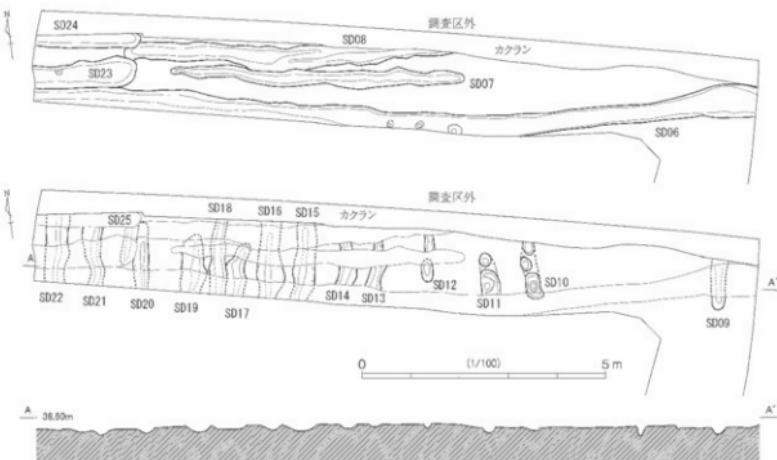
X69980～69981、Y4843～4845で検出した。長さ3.40m以上、幅1.03mで、深さ73cmを測る。長軸方位はN-27°-Wとなる。断面逆台形の直線的な溝で、Ⅲ層を掘り込んでいるが、中位から下は裸層(IV層)を掘り込む。覆土は褐色砂質土のブロックを含んだ黒褐色土を主体とする。溝に伴う遺物がなく、時期の特定はできない。



第13図 溝 SD05

4. 番跡 (第14図)

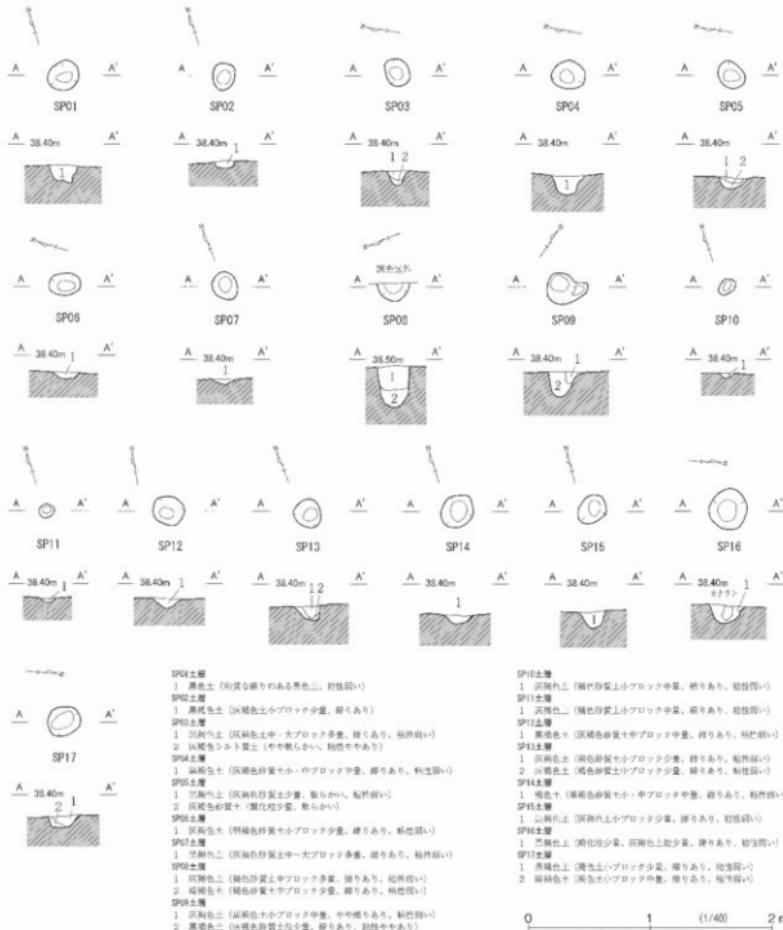
調査区の北側に東西方向と南北方向の幅の狭い溝が集中し、畠の畾脇の溝と判断した。東西方向の溝は調査区の東の端から西の端まで最長14m以上と長く続くもの、長さ6mほどの長さのもの等があるが、いずれも南北方向の小溝より新しい。畾方向を変え、繰り返し畠として利用された可能性がある。縄文土器の混入があるが、わずかな出土遺物からは、奈良・平安時代と考える。



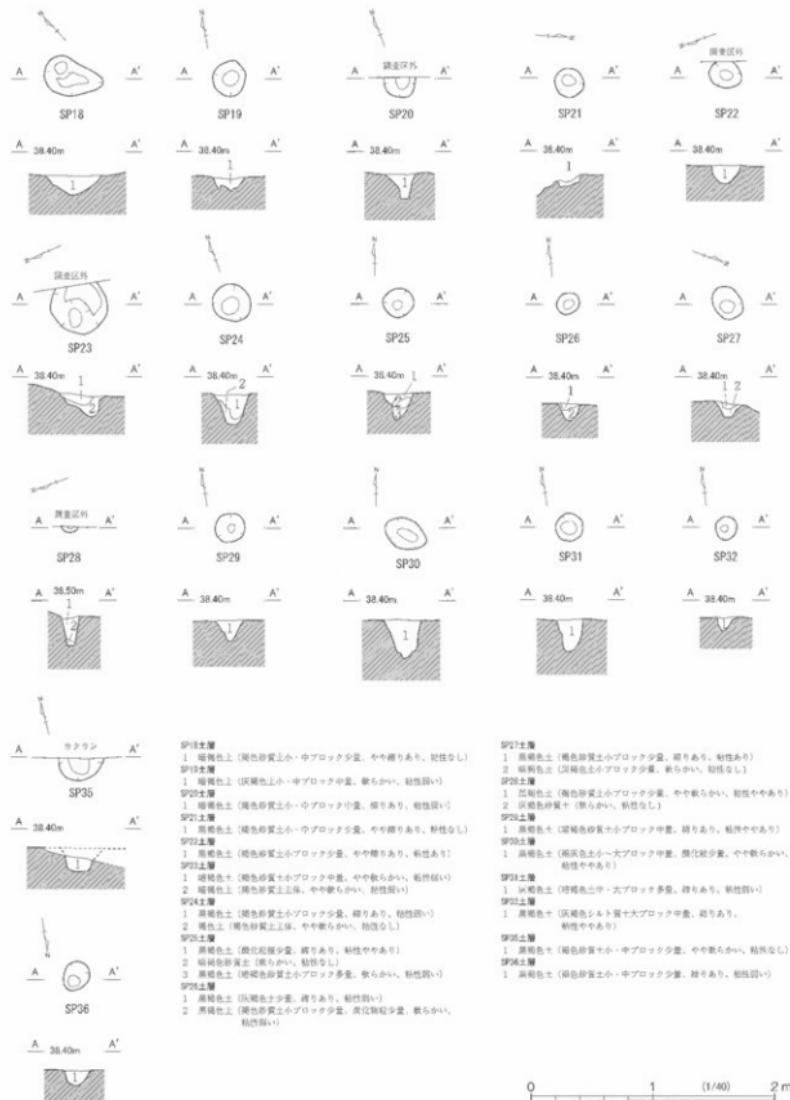
第14図 畠跡 SD06～25

5. ピット (第 15・16 図)

畝跡の部分を除いて、調査区全体でピットを 34 基検出した (SP 33・34 は欠番)。規模は、上端径が 20~40cm、深さ 10~30cm 程の小規模なものばかりで、掘立柱建物の柱列になるものはみられなかった。出土遺物がなく縄文時代の堅穴建物よりは新しいがその他との切り合いがなく、時期は不明である。2 基から 5・6 基程が集中するところもあるが、それぞれのまとまりの性格については不明である。



第15図 ピット SP01~17



第16図 ピットSP18~36(SP33・34欠番)

第4節 遺物

1～16は発掘調査、17～25は試掘調査の出土遺物である。

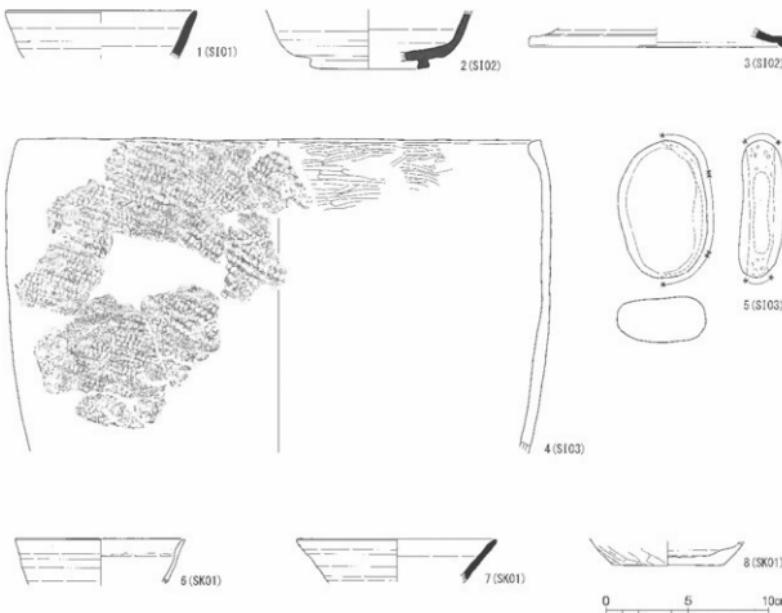
1. 発掘調査出土遺物（第17・18図、図版06・07）

S 101 1は須恵器杯(A)の口縁部片である。8世紀後半のものである。

S 102 2は須恵器杯(B)、3は須恵器蓋である。2は高台部が内罐部で接地する。3の口縁端部は折り返されている。2は8世紀後半、3は9世紀前半のものと推測する。

S 103 4は縄文時代後期の深鉢である。斜縄文が施される。5は磨石である。扁平な長楕円形で長側面側の先端寄りに敲打痕があり、中央には磨り痕がある。

S K01 6は土師器の楕である。口縁端部付近の内面に弱い稜を持ち外反している。7は須恵器杯(A)である。8は土師器の壺である。胴下端部外面をヘラケズリしている。9は須恵器の壺である。外面に平行叩き、内面には同心円文の當て具痕がある。平行叩きは、胴上半部片で見ると右上がりの斜め方向に叩いた後、左上がり斜め方向に叩いている。下半部には右上がり斜方向の平行叩き痕が残る。平行叩きの後に、ややまばらにカキメを入れている。10は土師器の壺で、10-1が頸部付近、10-2が底部付近の破片である。底部は丸底外面に平行叩きを施している。6・7は10世紀代の可能性があり、その他は9世紀後半以降である。



第17図 発掘調査出土遺物〔1〕

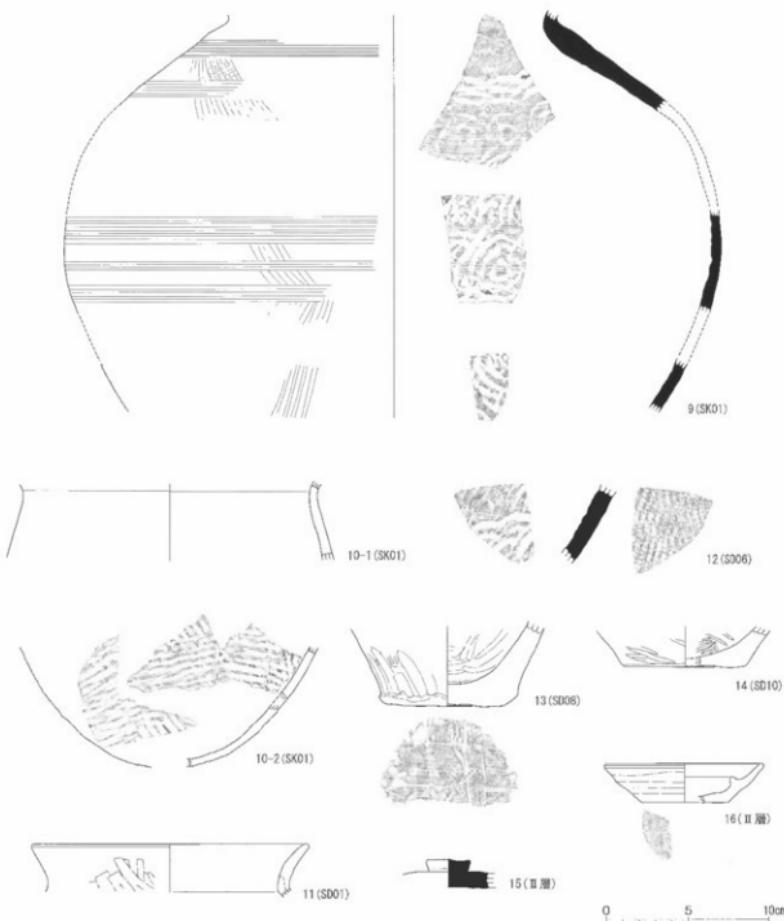
S D01 11は古墳時代後期の土師器壺である。口縁部は、緩やかに外反している。

S D06 12は須恵器の壺胴部破片である。外面格子叩き、内面には同心円文の当て具痕がある。

S D08 13は縄文土器の深鉢胴下端から底部である。外面に斜縄文が施され、底部に網代痕がある。

S D10 14は古墳時代前期の土師器壺である。内外面にミガキが施されている。

包含層（II層） 15は須恵器の蓋摘み部である。16は瀬戸美濃（灯明受皿）で1670～1780年代のものである。



第18図 発掘調査出土遺物 [2]

2. 評議調査出土遺物（第19図、図版07）

17は口縁部から肩部にかけて斜縞文を施した縄文時代後期の深鉢である。7号トレンチから出土しており、本調査の堅穴建物S I 03に伴う可能性がある。

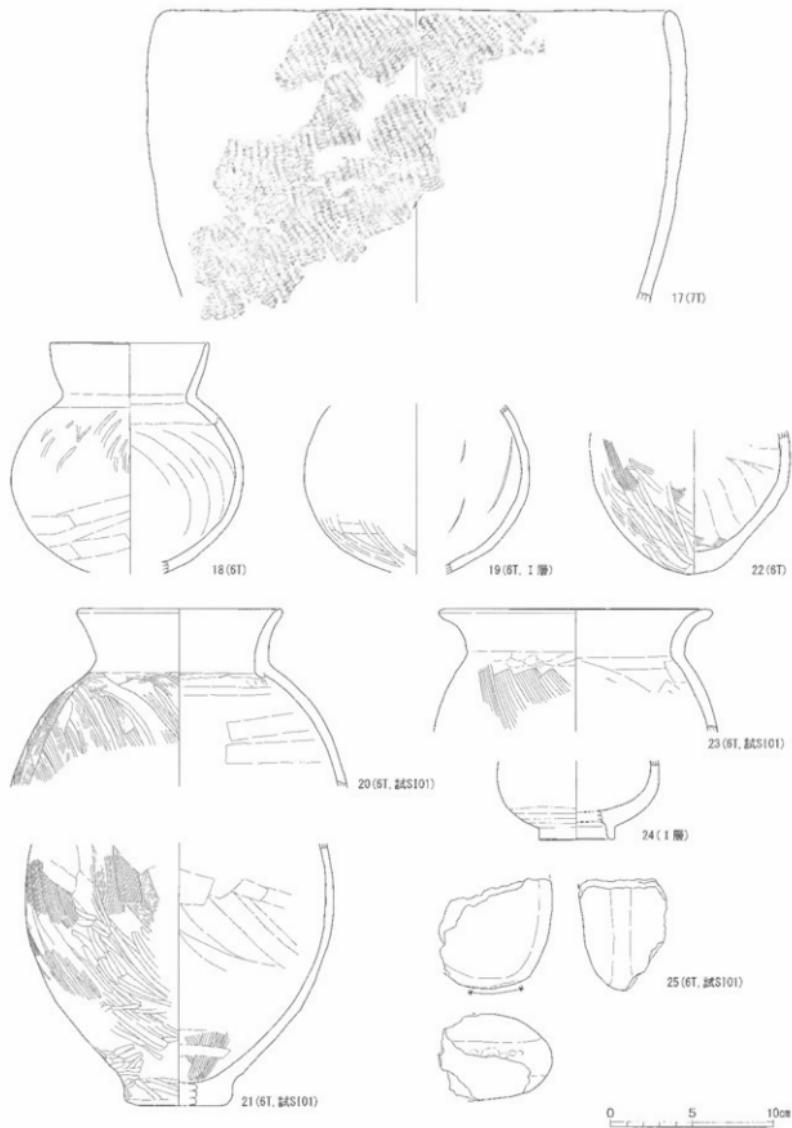
18～23は6号トレンチから出土した古墳時代前期の土器である。20・21・23は6号トレンチの堅穴建物(試)S I 01から出土し、18・19も(試)S I 01付近からの出土である。18・19は小型の壺で、肩部をハケ調整後ミガキを施す。20・21の壺は外面をハケ調整主体に一部ミガキを施す。22は小型の壺で、外面ハケ調整を主体にして一部ミガキが施される。23の土器壺はハケ調整が施される。

24は表土出土の碗である。18世紀後半～19世紀の瀬戸美濃である。

25は6号トレンチの堅穴建物(試)S I 01から出土した敲石である。

番号	構造番号	造形	種類	基盤	法量(cm)			地土	焼成	色調	特徴	残存	
					口径	器高	底径						
1	第17回 堅06	S I 01 塚原器	杯A	(11.8)	—	—	やや薄	不良	に高い度	ロクロ型形。	口縁部破片 (1/10以下)		
2	第17回 堅06	S I 02 塚原器	杯B	—	(7.3)	壺	良好	暗灰	ロクロ型形。内底部ナゲ。	体～底部破片 (1/10以下)			
3	第17回 堅06	S I 02 塚原器	壺	(15.6)	—	—	密、灰石	やや不良	明灰	ロクロ型形。	口縁部破片 (1/10以下)		
4	第17回 堅06	S I 03 磯土器	深鉢	(32.0)	—	—	やや粗、石英+ トントン	普通	暗灰	外縁2段RL縞文。内面横方向ミガキ。	口縁～側面 1/7		
5	第17回 堅06	S I 03 石器	磨石	長8.5	幅5.9	厚2.7	重さ2100g、砂岩。	下端部から側面に細かな敲打痕→側面に擦り痕。			丸形		
6	第17回 堅06	S K01 土印器	杵	(10.7)	—	—	やや粗、 石英+トントン	やや不良	灰黃	ロクロ型形。口縁部内面に模付痕。	口縁～体部 50%		
7	第17回 堅06	S K01 土印器	杵A	(12.4)	—	—	密、右尖	普通	灰	ロクロ型形。外縁に墨ぬれ痕。	口縁部1/6		
8	第17回 堅06	S K01 土印器	壺	—	—	(6.7)	やや粗、石英	普通	灰黒	ロクロ型形。外蓋腹部下端～底部手打ち～ ウケツ。	底部1/6		
9	第18回 堅06	S K01 土印器	壺	—	—	—	良好	灰		タクキ後に内外同色キメ。	削型破片 (1/10以下)		
10	第18回 堅06	S K01 土印器	壺	—	—	—	やや粗、石英	良好	に高い程 一底黒	底部上半ロクロナゲ、下半タキ。	堅部と崩下半部の崩 部		
11	第18回 堅06	S D01 上輪器	壺	(19.0)	—	—	やや粗、灰石+ 石英+モリ	良好	底灰～ に高い程	口縁部コロナゲ、底部外側ヘラナゲ。	口縁部1/6		
12	第18回 堅06	S D06 伝承器	壺	—	—	—	密	良好	灰	外裏縁格子タキ。	削型破片 (1/10以下)		
13	第18回 堅07	S D08 瓢文土器	深鉢	—	—	7.3	やや粗	良好	に高い程	外腹縁格子下端单脚溝文と強いビニナデ、 内面ユニアズ。直形時代。	底部2/3		
14	第18回 堅07	S D10 上輪器	甕	—	—	(7.3)	やや粗、 石英+トントン	普通	に高い程	外腹縁部外側ヘラグリ後にミガキ、内面 ミガキ。外蓋底部ナゲ。	底部2/5		
15	第18回 堅07	有孔 三脚	灰土器	—	—	—	密	普通	明灰	肩刃部内面ナゲ。	掩み52/2		
16	第18回 堅07	北竜 三脚	薄戸天井	火照皿	(9.8)	24	(5.4)	密	浅黄	口縁記外一面～内面全体に鉢底、逆部削除系 切り。	1/4		
17	第19回 堅07	試掘	瀬戸文土器	深鉢	(31.4)	—	—	やや粗、企唇舟	良好	灰黒	単脚RL縞文。内面ミガキ。	口縁～銅上半 1/10	
18	第19回 堅07	試掘 6T	上輪器	壺	(9.9)	—	—	やや粗、石英	良好	に高い程 輕	口縁部コロナゲ、底部外腹ヘラナゲ後にミ ガキ、内面ナゲ。	口縁～側面 2/5	
19	第19回 堅07	試掘6T 1号	土印器	壺	—	—	やや粗、 石英+石英	良好	済	済	削型外腹ヘラナゲ後にミガキ。	削型1/5	
20	第19回 堅07	試掘6T S I 01	土印器	壺	12.6	—	—	やや粗、 石英+石英	良好	浅黄	口縁部コロナゲ、底部外腹ヘラグリ後にミ ガキ、内面ナゲ。	口縁～銅上半 1/4	
21	第19回 堅07	試掘6T S I 01	土印器	壺	—	—	(6.5)	やや粗、 石英+モリ	良好	に高い程	頭部外腹ヘラグリ後にミガキ、内面下端ハケ ナゲ後にナゲ。	剥離～底部 1/6	
22	第19回 堅07	試掘 6T	土印器	壺	—	—	—	粗、石英	良好	に高い程	頭部外腹ヘラグリ後にミガキ、内面ヘラ ナゲ。	剥離～底部 1/4	
23	第19回 堅07	試掘6T S I 01	土印器	壺	—	—	—	やや粗、 石英+モリ	良好	黒	口縁部コロナゲ。頭部外腹ヘラグリ。剥部外 腹ヘラグリ。	剥離1/5	
24	第19回 堅07	試掘 1号	薄戸天井	甕	—	—	(4.9)	密	良好	JK	多部外腹～内面灰錆。	体～底部1/8	
25	第19回 堅07	試掘6T S I 01	石器	龜石	殊長 6.7	殊高 7.0	厚5.3	重さ2653g、安山岩。	下端に敲打痕。			1/4	

第1表 出土遺物観察表



第19図 試掘調査出土遺物

第IV章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
千葉博俊・高橋 敦

若竹町遺跡（富山県富山市悪王寺地内）は、神通川の支流である熊野川の右岸、神通川扇状地と常願寺川扇状地扇端とが接する付近に立地する。本遺跡の発掘調査では、縄文時代後期の竪穴建物や奈良・平安時代と考えられる竪穴建物、畠跡などが確認されている。

本報告では、上記した奈良・平安時代の竪穴建物（S I 02）と切り合って検出された土坑（S K 01）の年代の検討を目的として、同土坑埋積物（覆土）より採取された炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施した。

第1節 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、土坑（S K 01）覆土中より採取された炭化物 2 点（下層炭化物、上層炭化物）である。S K 01 は、平面がほぼ円形を呈し、底面に 2段の掘込みが認められる。また、覆土中からは奈良・平安時代の土器や須恵器などが出土している。

炭化物試料は、土坑の底面直上と覆土中部付近にそれぞれ層厚約 1cm 程度の炭化物層として確認されており、前者が下層炭化物（覆土 6 層）、後者が上層炭化物（覆土 3 層）とされている。今回の測定に供された試料は、いずれも前述の炭化物層を含む塊状を呈する不擾乱試料として採取されており、いずれも層厚約 1cm 前後の炭化物層が確認された。なお、これらの炭化物層の肉眼等による観察では、形状や組織構造が明瞭な炭化物が確認できなかったため、それぞれの炭化物層を測定に供している。

2. 分析方法

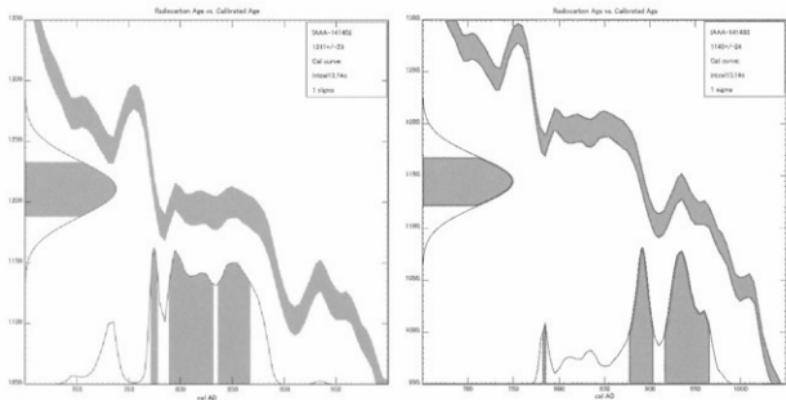
試料に土壤や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C (30 分) 850°C (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定时に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年校正用) (yrBP)	曆年較正結果								確対比 割合(%)						
				cal	AD	771	-	cal	AD	779	cal	BP	L179	-	1.171	0.092		
SK 01 下層炭化物	1,210±20	-24.44±0.58	1,211±23	σ	cal	AD	789	-	cal	AD	832	cal	BP	L161	-	1.118	0.521	IAAA- 141402
					cal	AD	836	-	cal	AD	868	cal	BP	L114	-	1.082	0.387	
				2σ	cal	AD	722	-	cal	AD	740	cal	BP	L228	-	1.210	0.069	
					cal	AD	767	-	cal	AD	886	cal	BP	L183	-	1.064	0.931	
					cal	AD	782	-	cal	AD	786	cal	BP	L168	-	1.164	0.630	
SK 01 上層炭化物	1,150±20	-27.17±0.57	1,145±24	σ	cal	AD	877	-	cal	AD	904	cal	BP	L073	-	1.046	0.347	IAAA- 141403
					cal	AD	916	-	cal	AD	967	cal	BP	L034	-	0.983	0.623	
				2σ	cal	AD	777	-	cal	AD	792	cal	BP	L173	-	1.158	0.069	141403
					cal	AD	802	-	cal	AD	846	cal	BP	L148	-	1.104	0.110	
					cal	AD	856	-	cal	AD	974	cal	BP	L094	-	0.976	0.831	

第2表 放射性炭素年代測定および曆年較正結果



第20図 曆年較正結果(1σ)

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma 58%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は $\sigma \cdot 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

3. 結果および考察

炭化物試料の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、SK01 下層炭化物が $1,210 \pm 20\text{yrBP}$ 、SK01 上層炭化物が $1,150 \pm 20\text{yrBP}$ である。これらの補正年代に基づく暦年較正結果 (1σ) は、SK01 下層炭化物が calAD 771 - calAD 868、SK01 上層炭化物が calAD 782 - calAD 967 を示す（第 2 表、第 20 図）。

以上の暦年較正年代 (1σ) を参考とすると、SK01 覆土に確認された炭化物層は、下層が 8 世紀後半頃から 9 世紀後半頃、上層が 8 世紀後半頃から 10 世紀後半頃という年代観が推定され、これらの年代観は調査所見とも整合する。

また、今回の測定に供した炭化物は、前述したように肉眼等による観察ではその性状や由来等に関する情報が得られなかっただけ、実体顕微鏡および生物顕微鏡による観察を行った。その結果、SK01 下層炭化物にはイネ科の機動細胞珪酸体や不明植物片などが、SK01 上層炭化物にはスギ型の分野壁孔を持つ針葉樹の材片やイネ属の珪化組織片（短細胞列）および不明植物片などが認められ、このような状況から炭化物層には複数種類の植物遺体が含まれることが明らかとなった。なお、上記した炭化物層の性状確認は、概査によるものであるため、さらに詳細については植物珪酸体（灰像）分析や水洗選別を用いた微細植物片分析などによる検討が期待される。

第V章 総括

〔試掘調査〕

発掘調査に先立つ試掘調査では、6号トレンチで一辺4m規模の堅穴建物(試)S I 01を検出し、古墳時代前期の土師器が出土した(第5図参照)。7号トレンチ東側では、縄文時代後期の土器が出土した。このほかに、土坑・溝・ピットを検出した。

〔発掘調査〕

縄文時代 後期の堅穴建物を1棟検出した(S I 03)。出土した粗製の深鉢は、内湾する口縁部から斜縄文を施し、底部は網代痕となるもので、吉岡遺跡第12地区の包含層からも一定量の出土がある。熊野川周辺の扇状地における縄文時代の集落形成は、後期後半に始まり、晚期後半になって本格化するとされる(富山市教委2002)。堅穴建物S I 03の検出は、本遺跡においても後期段階から集落が形成されたことを示し、川辺の集落という立地からは、この地域の後・晚期の集落形成の背景を考えるうえでも貴重な事例となった。後・晚期の堅穴建物は熊野川両岸の吉岡遺跡、悪王寺遺跡、大利屋敷遺跡等で確認されており、特に吉岡遺跡は北東方向に近接し、地理的にも時期的にも本遺跡との関連が強い集落と考えられる。

古墳時代 わずかであるが古式土師器が出土し、試掘調査の堅穴建物(試)S I 01でまとまった量の古式土師器が得られた。若竹町遺跡の平成19年度調査(富山市教委2008)では、布留式壺を含む古式土師器が出土し、今回の堅穴建物の検出により、本遺跡に古墳時代前期の集落が存在することが確実となった。後期の溝S D 01もあることから、熊野川流域で希薄であった古墳時代の遺跡としても注目される。

奈良・平安時代 堅穴建物2棟(S I 01・02)、土坑1基(S K 01)、畑跡を検出した。出土遺物は平安時代を主体とし、堅穴建物は9世紀代、土坑S K 01は10世紀代の可能性がある。平成19年度調査では、同じく熊野川右岸で平安時代の堅穴建物1棟、掘立柱建物1棟を検出しており、本遺跡の古代集落は川沿いに堅穴建物が点在し、少数の掘立柱建物を伴う小規模な集落であったと想定される。堅穴建物の構造は詳らかでないが、試掘調査6号トレンチの南側で検出した焼土と炭が、S I 02に伴うとすれば北カマドと考えられ、平成19年度調査の堅穴建物の西カマドとあわせ、9世紀中頃以降にカマド方位に対する規則性が弛緩するという任海宮田遺跡で指摘された傾向に同調するものである。本遺跡に隣接する吉岡遺跡の古代集落は、堅穴建物4棟、掘立柱建物6棟(富山市教委2002)であり、本遺跡より掘立柱建物の比率が高い。集落の中心はさらに西側にあると想定される。溝S D 05は古代と特定できないが、吉岡遺跡の西方へ向かうことから、同遺跡との関わりが想定される。

畑跡は、試掘結果を加味すると、主に調査地の北へ広がると考えられ、平成19年度調査の畑跡と同様に、川辺の堅穴建物の背後に畑跡が広がる景観が想定される。熊野川周辺の扇状地では、8世紀後半に左岸の任海宮田遺跡で集落形成が本格化し、地域の開発拠点集落として10世紀前半まで継続する。同遺跡は土師器生産、鍛冶、紡織、河川漁撈など多様な手工業生産を伴うが、紡織関連遺物の存在から大規模な布や絹の生産が想定される。熊野川流域は水田耕作に不向きな地質であることから、麻や桑などの纖維作物や陸稻などの栽培が大規模に行われた可能性が高い。熊野川右岸でも8世紀になって上新保遺跡の集落が形成されるが、広範囲に畑跡が検出され、植物珪酸体分析により陸稻や麦類の栽培が指摘された。同じく右岸の本遺跡や吉岡遺跡も9世紀には集落が形成され、畑跡を伴う。畑跡は歎方向を変えながら継続し、吉岡遺跡では居住地からの転換も確認されるなど、積極的な畑地化が窺われる。このように、本遺跡の古代集落は、8世紀以降に顕在化する熊野川周辺の扇状地における新規開墾集落の一端を担うものであり、その主要な生産基盤のひとつに畑作を想定することができる。

【引用・参考文献】

- 池野 正男 2013 「越中古代の布・絹生産遺跡と性格」『大境』第32号
- 大類 伸 監修 1968 「日本城郭全集」⑥
- 木本 秀樹 2009 「古代の越中」 高志書院
- 熊野校下自治振興会 1989 「熊野郷土史」
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 「任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ」
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007 「任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ」
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2008 「任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ」
- 菅 英志 1980 「日本城郭体系」 第7卷
- 富山県 1976 「富山県史通史編Ⅰ 原始・古代」
- 富山県 1984 「富山県史通史編Ⅱ 中世」
- 富山県埋蔵文化財センター 2006 「富山県中世城館遺跡総合調査報告書」
- 富山市教育委員会 1996 「富山市上新保遺跡試掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2000 「富山市上新保遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2002 「富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2008 「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 若竹町遺跡・富崎遺跡」
- 富山市教育委員会 2009 「富山市上新保遺跡発掘調査報告書」
- 中村 太一路 1963 「富南の歴史」
- 越川校下自治振興会 1968 「越川の郷土史」

写 真 図 版



調査区全景（東から）



調査区全景（北から）



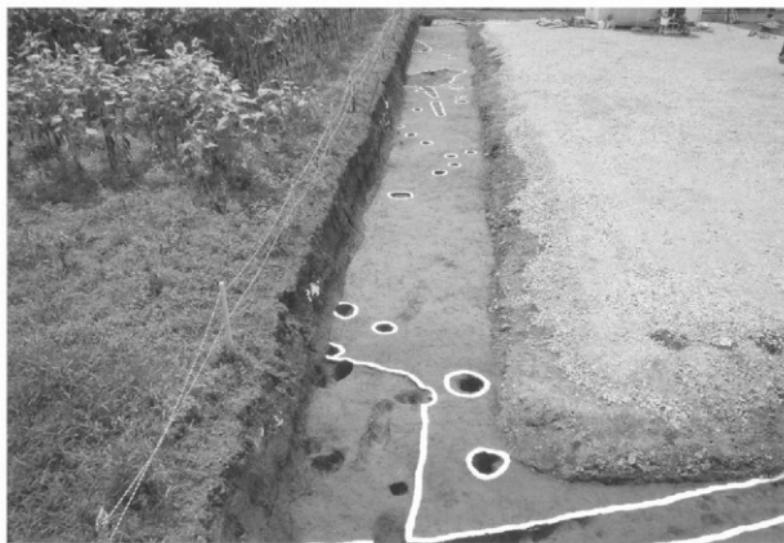
調査区全景（西から）



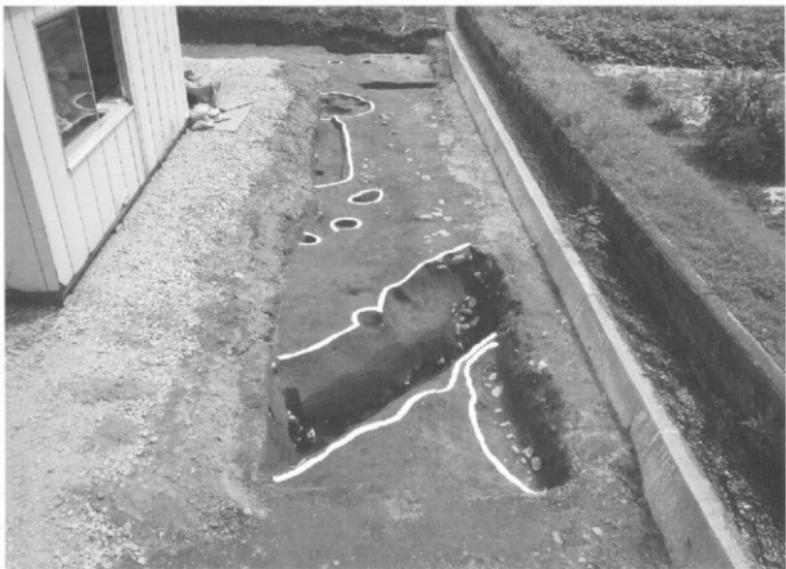
調査区全景（上が東）



北側調査区全景（西から）



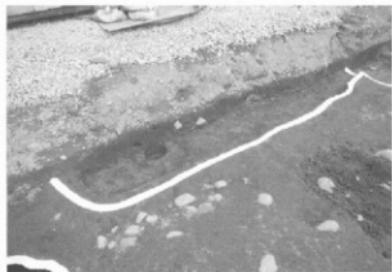
東側調査区全景（北から）



南側調査区全景（西から）



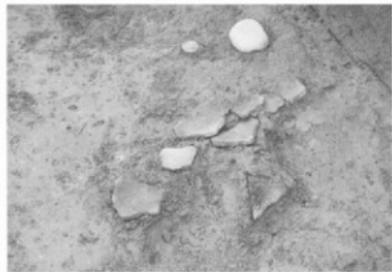
SI01 完掘（西から）



SI02 完掘（南西から）



SI03 完掘（西から）



SI03 遺物出土状況（南西から）



SK01 完掘（南西から）



SK02 完掘（北西から）



SD01 完掘（南西から）



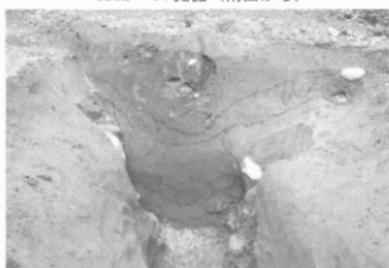
SD01 遺物出土状況（西から）



SD02 ~ 04 完掘（南西から）



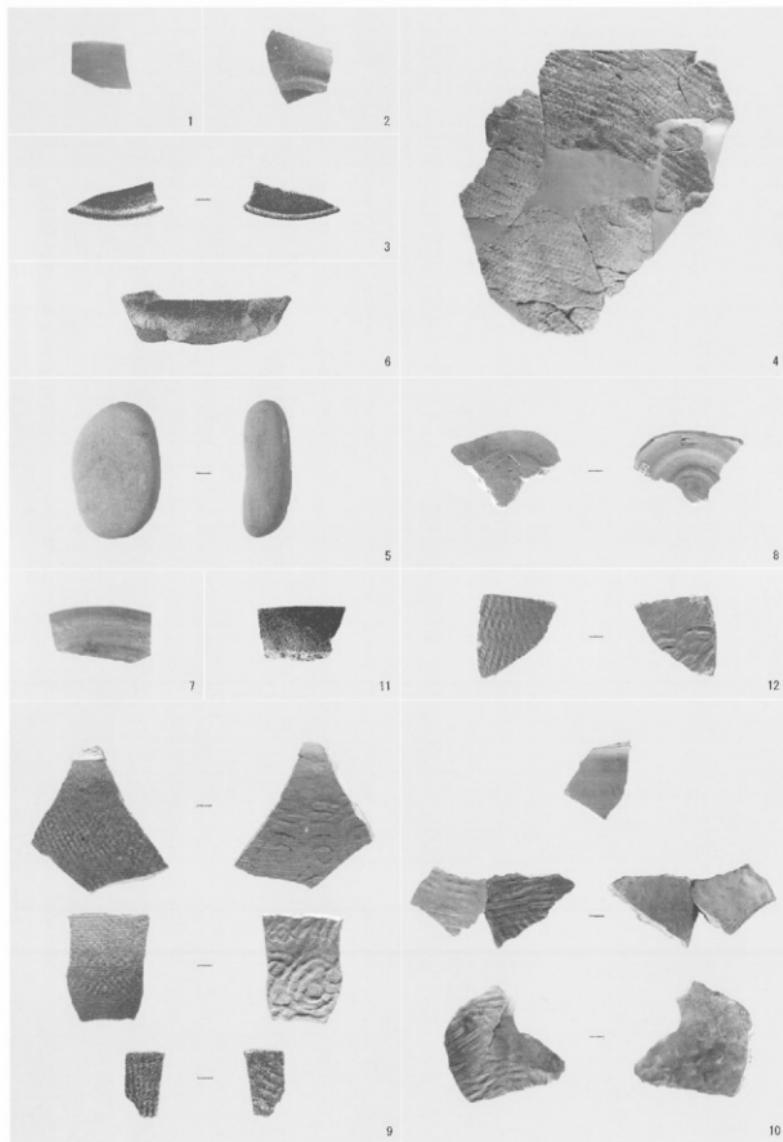
SD05 完掘（北西から）



SD05 土層断面（南から）

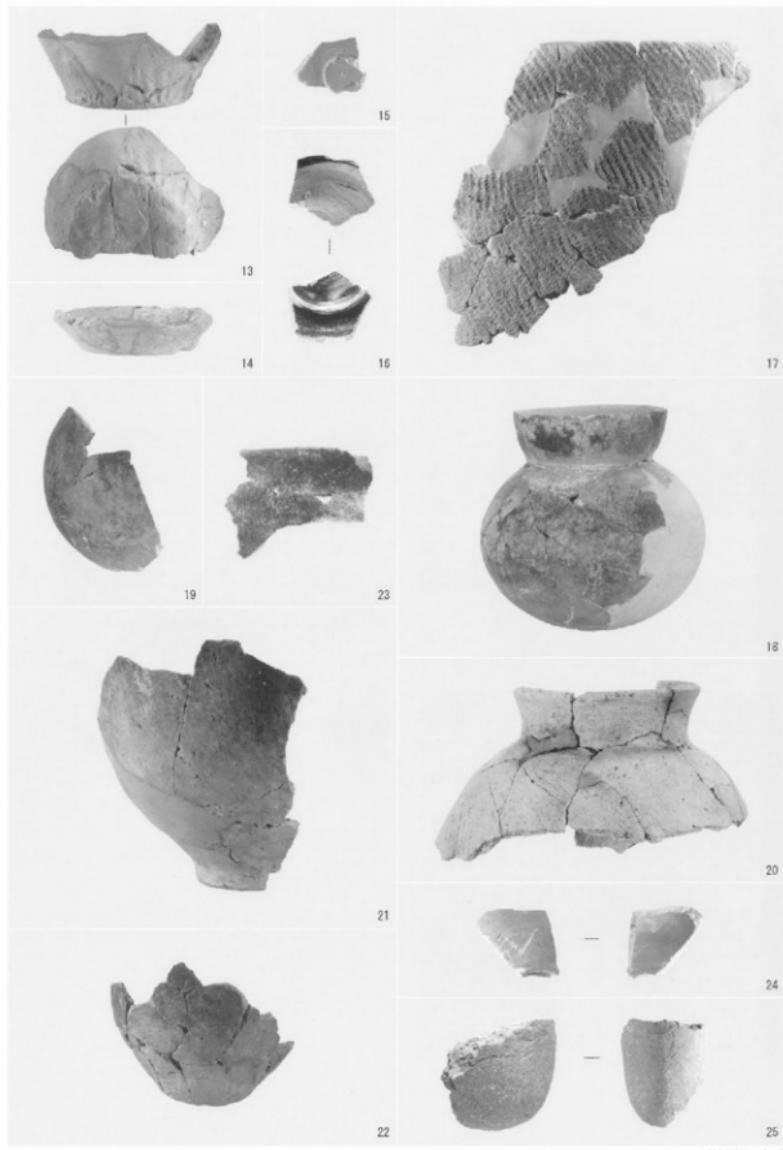


畑跡完掘（東から）



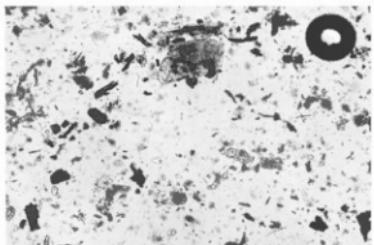
出土遺物①

(縮尺 1 / 3)

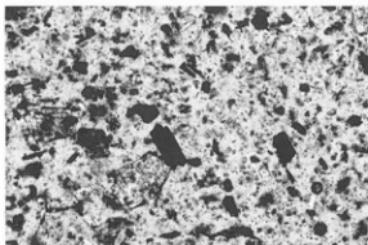


出土遺物②

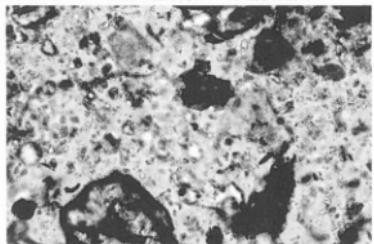
(縮尺1/3)



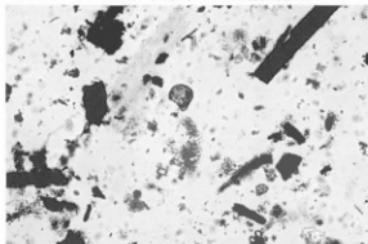
1. プレバランート内の産状(SK01; 下層炭化物)



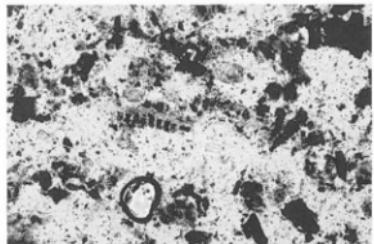
2. プレバランート内の産状(SK01; 上層炭化物)



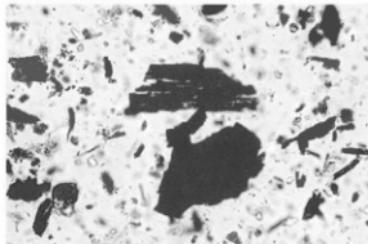
3. 針葉樹材片(SK01; 上層炭化物)



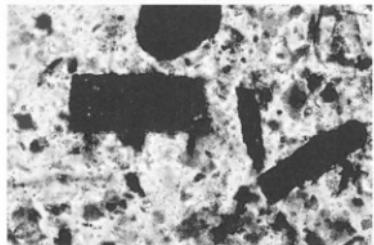
4. 機動細胞珪酸体(SK01; 下層炭化物)



5. イネ属焦細胞列(SK01; 上層炭化物)



6. 不明植物片(SK01; 下層炭化物)



7. 不明植物片(SK01; 上層炭化物)

10 μm (1, 2) 10 μm (3-7)

報 告 書 抄 錄

富山市埋蔵文化財調査報告書74

わかたけちょう

富山市若竹町遺跡発掘調査報告書

－(仮称) 鹿野コミュニティセンター(公民館)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

発行日 平成27(2015)年3月16日

編集 有限会社毛野考古学研究所富山支所

〒939-0351 富山県射水市戸破1679-3太閤山壱番館A

発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24

電話 076-442-4248 Fax 076-442-5810

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 中村印刷工業株式会社

